外来で遭遇する皮膚疾患とその対応 - 4

皮膚そう痒症、アトピー性皮膚炎

● 総監修 ●
大阪大学大学院医学系研究科
情報統合医学皮膚科学講座
片山 一朗

2017.12 ● Copyright(c) Japan Medical Association. All rights reserved.

皮膚そう痒症、アトピー性皮膚炎

【1】皮膚そう痒症

●皮膚そう痒症は、内臓疾患や内分泌・代謝疾患が原因となることも多く注意が必要である。

○症状

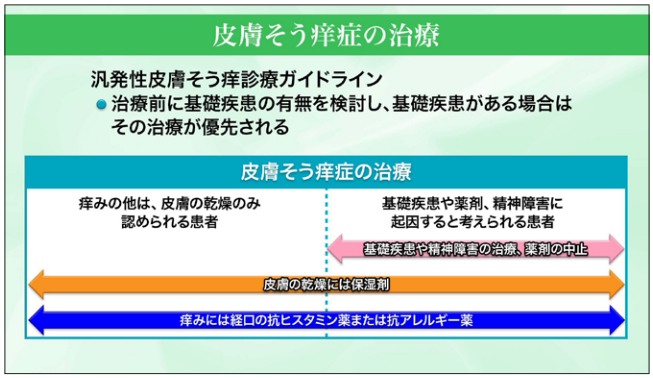
●痒みだけが生じ、湿疹や蕁麻疹のような痒みの原因が認められない疾患群である。

○分類

●痒みの発生部位により、限局性そう痒症と汎発性そう痒症に分類される。
●限局性そう痒症：外陰部、肛門に多く、ストレス、便秘などが関与している。また、男性では前立腺肥大症、尿道狭窄が、女性では卵巣機能低下にみられる場合がある。
●汎発性そう痒症は高齢者に多く、腎疾患、肝・胆道系疾患、代謝異常症など基礎疾患に由来することが多い。

○治療

●治療前に基礎疾患の有無を検討し、基礎疾患がある場合はその治療が優先される。
●掻破によって掻破痕や二次的な湿疹を引き起こすため、経口の抗ヒスタミン薬や抗アレルギー薬を投与する。



2017.12 ● Copyright(c) Japan Medical Association. All rights reserved.

【2】アトピー性皮膚炎

●痒みを伴い、ほぼ左右対称性の分布を示す特徴的皮疹が現れる。
●急性湿疹と慢性湿疹があり、慢性・反復性の経過をたどる。
●乳児では2ヵ月以上、その他では6ヵ月以上が慢性と定義される。

●皮膚のバリア機能異常と、免疫・アレルギー的異常の両方が複雑に絡み合って発症すると考えられている。
●皮膚バリア機能の異常は外界からの異物の侵入を容易にし、炎症が起こりやすくなっている。
●成人では体幹部のびまん性紅斑、頸部の色素沈着、顔面紅斑など、難治性の病変を持つ人が多い。

○治療の基本原則

●スキンケア、薬物療法、悪化因子の検索とその対策。

○悪化因子の検索とその対策

●悪化因子は患者さんによって異なるため、詳細に病歴を聴取する。
●特異的IgE値を参考に検索して慎重にアレルゲンを同定し、必要に応じて環境から除外する。

○スキンケア

●皮膚のバリア機能を低下させないよう機械的刺激の少ない皮膚洗浄と、保湿剤を塗布するスキンケアを行う。

 ● Copyright(c) Japan Medical Association. All rights reserved.

○薬物療法

●ステロイド外用薬とタクロリムス軟膏によって皮膚炎を鎮静化し、寛解に導く。
●寛解導入後も、定期的にステロイド外用薬あるいはタクロリムス軟膏と保湿剤を併用する「寛解維持療法」が推奨される。
●非鎮静性の抗ヒスタミン薬は痒みを改善し、夜間の睡眠を十分にとれるようにするため、患者さんの QOL を高める補助手段となる。

○ステロイド外用薬

●炎症部位でのシクロオキシゲナーゼ-2 の誘導抑制やホスホリパーゼ A2 の活性抑制を通じて、皮膚の炎症を抑える。
●高齢者では局所性副作用（皮膚萎縮、ステロイド紫斑など）が生じやすいため、通常用いるよりも弱めのステロイド外用薬の選択が必要で、ストロンゲストクラスを選択することはほとんどない。

○タクロリムス軟膏

●ステロイド外用薬と作用機序が異なり、T 細胞からのサイトカイン産生を抑制して炎症を抑える。
●ステロイド外用薬などでは効果が不十分、または副作用により投与ができない患者さんに使用する。
●使用開始時にヒリヒリ感や灼熱感といった一過性の皮膚刺激感が生じることがあるが、通常、皮疹の改善とともに消退し 1 週間程度で落ち着く。
●事前に刺激感について患者さんに十分に説明することが大切である。

【3】監修者からのメッセージ

○皮膚そう痒症

●汎発性皮膚そう痒症の診療ガイドラインでは、全身疾患の除外を強調している。
●既往歴などの詳細な聴取や、痒み以外の症状に注意を払い、疑われる疾患に応じた検査を行うことが重要である。

○アトピー性皮膚炎

●たくさんの悪化因子が知られているが、衣類などによる肌への刺激が見落とされがちである。
●敏感な皮膚に下着の縫い目が擦れて、悪化させていることもある。
●縫い目のない下着も開発されているので、利用する方法もある。

2017.12 ● Copyright(c) Japan Medical Association. All rights reserved.